

衆議院議員 松本忠雄 著

10^セン

第百書房發行



中國共産黨の活躍

赤化の實勢力

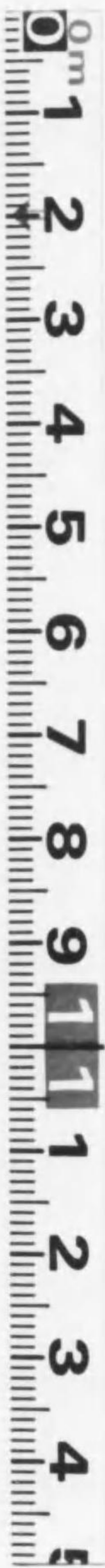
特279

351

特279-351



*76W10958 *



始



1947.9.30

760

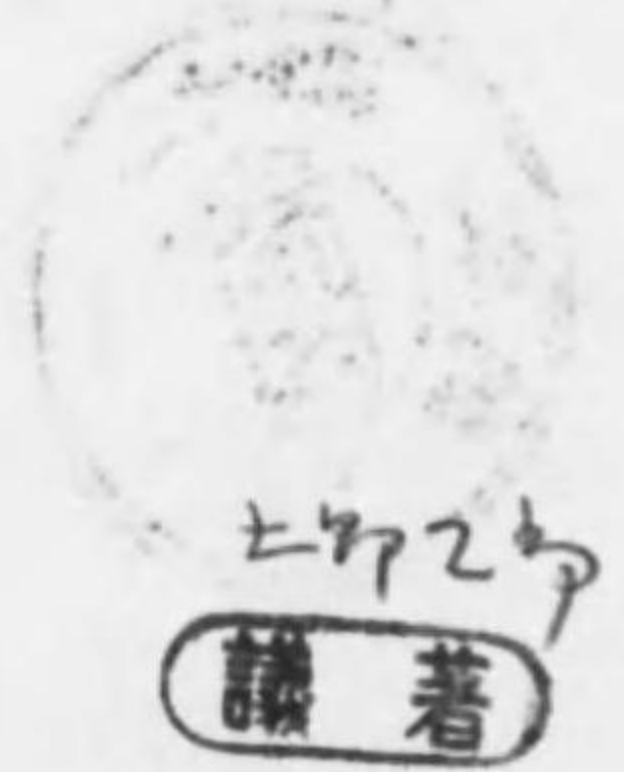


松本忠雄著

支那赤化の實勢力

中國共產黨の活躍

東京・第百書房發行



目次

一、はしがき	(一)
二、中國共產黨はどうして出来たか？	(六)
三、共產黨と國民黨との提携	(三三)
四、革命聯合戦線の決裂	(三七)
五、共產軍及びソヴェート起る	(四二)
六、ソヴェート共和國中央政府の樹立	(四七)
七、第一——五次討伐	(五〇)
八、共產軍の西北集結	(五四)
九、新戦術——抗日聯合戦線	(六一)
一〇、結 び	(五一)

76W10958



支那赤化の實勢力 中國共產黨の活躍

松 本 忠 雄

一 はしがき

支那に於ける共產運動は、最近ますますわが朝野の注意を惹いて來たやうであります。いはゆる「抗日聯合戦線」の背後に、共產黨の魔手が動いてゐるとか、西北支那に集結してゐる共產軍が、内蒙地方に侵入して來るとか、それに對して日支兩國は、共同して防衛に當らねばならぬとか、かういつたやうな報道が、毎日のやうに新聞紙上に出るのであります。成都事件後の日支交渉に於いても、北支問題と並んで、「防共」(赤化共)が最も重要視されてゐると、新聞紙は報じてゐます

が、さて、支那に於ける共産運動なり、又はその主體となつてゐる中國共産黨、或はその武力を成すところの共産軍等については、詳しい説明が與へられてゐないのである。

勿論、皆無といふわけではありません。この問題に最も深い注意を必要とする方面、例へば外務省とか、參謀本部とかでは、それぞれ専門の係りを置き、精密な調査をやつてゐるのであります。その報告書も、「官版」として存在はしてゐるのでありますが、あまりに専門的に過ぎ、詳しく過ぎ、ちよつと要領が掴みにくい。例へば「中華ソヴェート共和國」主席の毛澤東が、第二回中華ソヴェート大會で、こんな演説をやつたとかいつて、六號活字ベタ組み無慮五十頁を埋める全文を採録したり、共産軍が山西に侵入したといつては、何月何日の状況はかうだ、何日にはかうなつたと、細圖十五六葉を附して説明してあるといつた調子で、あまりに専門家向きに出来てゐて、素人には取附きにくい。それに第一、これらの官版は、官廳執務用の、いはゆる「秘」調書で、民間には手に入らぬのです。

民間にもないことはない。日本外事協會、東亞經濟調查局、大阪對支經濟聯盟などから、相當立派なものが出るには出てゐますが、これらもなかなか読みづらい。徒らに資料の多きを求める

ためか、ゴツゴツしてゐて、大衆に縁遠いものとなつてゐます。

これではならぬ。是非とも噛みくだいて、支那赤化運動の過去・現在・將來を平易に解説し、大衆の智識とせねばならぬと思ひついたので、こゝに本バムフレットを起稿することとしたのであります。しかし、事柄そのものが、相當七面倒くさいものですし、テーゼだ、宣言だで、小面倒なのがノベツに出て来るし、それを全然省くわけには行かないので、おのづから筆が乾燥して来るのです。スラスラと読み下せさうな、氣の利いたものは、或は出来ないかと思ひますが、出来るだけやつて見ませう。

さて、共産運動といふものは、思想的・社會的・政治的の運動であります。思想的には唯物辯證法の哲學に基き、社會的にはプロレタリアートとブルジョア、農民と地主との階級闘争を展開し、政治的には社會主義國家・世界を建設しようとするものであります。それが何國でもよい、或る一國に於いて發生・成長するためには、諸種の條件が備はつてゐなければならぬと考へます。では支那に於いて、(一)共産主義を受け容れるための、思想的の素地があるかどうか？ (二)社會狀態が、共産運動の發生に適してゐるかどうか？ (三)外國からこの主義・運動を、強制的に

入れようとする努力があつたかなかつたか？ の諸點を顧みると、我々は支那に於ける共産運動が、今日此の如く猖獗を極めてゐることの、決して偶然でないことに氣附くのであります。

先づ、思想的の素地に就いて考へて見ませう。老子、莊子の哲學が、無政府共産主義的色彩を帯びてゐることは、周知の事實であり、これを近代語に翻譯すれば、ソツクリそのまゝ共産主義者のスローガンにあてはまるもののあることは、この方面の研究者が、我々に報じてゐるところです。孟子に見える許行とその弟子の言説は、「働かざるものは食ふべからず。」といふに近く、周公井田の法の如きは、土地共有制度の古い一模型なのであります。かやうに、共産主義に類似する學說・制度は、支那では昔から行はれてゐたのであつて、端的にいへば、共産主義などといふものは、支那人に取つては、決して耳新しいことではないのであります。終に體系づけられなかつたとはいへ、かうした考へ方をした、もしくは實行に移した、祖先を、彼等は持つてゐたのであります。素地は好きなり、とまでは行かぬかも知れませんが、受け容れ得る程度のもは持つてゐたと斷じ得られるのです。

次ぎに、社會状態はどうであつたか？ 共産運動の成長に適してゐたかどうか？——こゝで、

想起していただきたいことは、すでに一九一一年に、支那では革命があつて、清朝が打倒され、名のみではありますが、中華民國となつてゐたといふことです。さて、共和國になるにはなつたが、それでピタリと國內が治まつたわけではなく、御承知の通りの内亂に次ぐ内亂で、社會の秩序は紊亂し、經濟は破壊され、農村は荒廢してゐたといふ有様で、たまたま共産運動のためには、好個の苗床が準備されてゐたといへるであります。況んや軍閥混戦のさ中に、「中國國民黨」といつたやうな、急進ブルジョア及びインテリゲンツィアの黨があつて、國家改造の原理を探り尋ねた揚句の果てが、どんなに有害な主義であつても、眼をつぶつて利用しようといふ邪道、又は横道に陥つてゐたものさへあつたに於いてをや。

だが、それにしても、最後に、「世界革命の參謀本部」といはれるコミンテルン（正式には共産イ
ル、別名第三インターナショナル、譯して國際共産黨又は共産國際、コミンテルンは略稱です）の指導、といふことがなかつたならば、支那に於ける共産運動は、決して今日のやうな猖獗を見ることはなかつたのでありませう。數十百人の會員を擁するに過ぎなかつた、微々たる啓蒙團體を育ぐくんで、これを「中國共産黨」に成長させ、それと中國國民黨とを提携させ、人・武器・知恵の三段援助を與へて、「民族革命聯合戦線」を結成させ

る一方、労働争議を指導しては、五・三〇事件（一九二五年五月三十日の上海内外棉争）や沙基事件（五・三〇事件が廣東に波及）のやうな大規模な罷業を勃發させ、聯合戦線破るるや、赤色バルチザン隊の組織、ソヴェートの建設を教へ、終に中國ソヴェート政府の樹立に導く等、コミンテルンの指導の周密・剴切・效果的なることは、實に驚くべきものがある。すなはち、國外から共産主義を
入れようとする努力は、まことに並々ならぬものがあつたのであります。支那に於ける共産運動
發生の原因を算へてここに至り、我々はコミンテルンの指導といふものを、特筆大書しないわけ
には行かないのであります。コミンテルンこそは、支那共産運動の父たり、兄たり、且つ母を兼
ねるものであります。

二 中國共産黨はどうして出來たか？

支那ではじめて共産主義といふ術語が使はれたのは、今から約三十年前の一九〇九年に、廣東
の無政府主義者劉思復に依つてでありました。これより先き、支那革命主義者の一支派に「巴里
新世紀派」といふのがありました。巴里に留學して、クロボトキンの無政府主義に共鳴し、雑誌

「新世紀」を發行して、外來左傾思想を故國に紹介してゐた張繼、李石曾、吳敬恒の一派がそれ
であります。この派が支那の青年に與へた影響のうちから、支那無政府主義運動隨一の闘士と
いはれる劉思復が産れたのです。一九〇九年劉夫妻は廣東に無政府主義團體「晦鳴學舎」を創立
してクロボトキン學說の紹介に努め、一九一三年機關誌「民聲」を發行し、無政府主義學說紹介
から暗殺運動獎勵に移り、一九一五年病死するまで、無政府主義のために孤軍奮闘したが、彼は
この誌上に於いて、コミニズムにはじめて共産主義といふ譯語をあてはめたのです。かうした
経緯から、劉を支那最初の共産主義者とし、晦鳴學舎を最初の共産主義團體とする人もあります
が、それは些さか當を失してゐるやうに思はれます。

第二インターナショナル系の社會主義團體としては、一九一二年江亢虎に依つて創立され、孫
文、張繼等を黨外の領袖として、その支持を受けてゐた「中國社會民主黨」といふのがあつて、
次ぎのやうな政綱を發表したことがあります。黨勢も振はず、ただ一種の啓蒙團體としての役
目を果たしたに過ぎません。

（一） 共和に賛同する。

(二) 種界を融和する(人種的偏見を去る)。
(三) 法律を改良し、個人を尊重する。
(四) 世襲財産制度を破除する。
(五) 公共機關を組織し、平民教育を普及せしめる。
(六) 直接生利の事業を振興し、労働家を奨励する。
(七) 専ら地税をのみ徴し、一切の税を免ずる。
(八) 軍備を制限し、力を軍備以外の競争に注ぐ。

新世紀派、晦鳴學舎、中國社會民主黨を先驅者とし、眞の意味に於ける共產主義團體として登場したのは、李大釗、陳獨秀を指導者とし、一九一八年春北京大學内に發生した「マルクス主義研究会」であります。つづいては湖南の長沙第一師範學生毛澤東等の「マルクス研究会」であります。勿論この外にも、類似團體が方々に起つたことと思はれますが、史上に残るのはこの二つであります。

共產主義のために、好個の苗床が支那に準備されてゐたと、前に書きましたが、一九一七年の暮、この苗床に、種子が下されました。ロシア革命です。その影響を、最鋭敏に感受したインテ

リゲンツィアは、所在にマルクス主義及びロシア革命研究の團體を起しました。その代表的なものが、前述した二團體です。就中、後に中國共產黨の母體となつたのが、北京大學内のマルクス主義研究会であります。

會の發起者李大釗は、その當時まだ三十歳そこそこの一青年で、北洋法政專門學校を出てわが早大文科を卒業し、歸國後北京大學圖書館主任をやつてゐたが、その時の文科學長が有名な陳獨秀で、教授に胡適、沈尹默、周作人等があり、校長に蔡元培を戴き、ともに支那黎明運動の立物として、白話詩(口語)提倡、文學革命、孔子教排斥、家族制度反對、舊道德破棄、女子解放、人道主義鼓吹等の運動を試み、北大は新文化運動の搖籃として世界的に名を知られてゐたのです。李大釗は末席の教授で、勢力はさほど大でなかつたが、黙々としてマルクス主義の研究に没頭し、終に張國燾、韓麟符等左傾學生數十人を糾合して、會を創立したのであります。文科學長陳獨秀が、これを支持したことは勿論で、世人はこの一派を「陳獨秀グループ」と呼んでゐました。

マルクス主義研究会成立の翌年、すなはち一九一九年五月四日に、有名な「五・四運動」が起りました。日支軍事協定反對、ヴェルサイユ條約山東條項調印反對の大デモです。一九一八年か

ら九年にかけ、日支軍事協定に反対する日本留學生は續々歸國し、上海を中心として全國的デモを開始したが、北京の學生はたゞちにこれに應じ、時の北京政權、段祺瑞政府に對して、二十一ヶ條反對、及びこの二十一ヶ條をそのまま承認したヴェルサイユ條約調印反對を絶叫しました。五月四日大デモが北京天安門外廣場に開かれ、興奮した學生は親日派の曹汝霖邸を焼打ちした。これが五・四事件で、爾後の國民運動、反帝國主義運動に、多大の影響を與へました。さうしてこの事件に、主導者となつて動いたのが、マルクス主義研究会であつたことは勿論です。彼等は、このことに依つて、「集團」の威力をはじめて發見しました。軍閥の勢威は、一見強いやうだが、微力な我々でも、結束しさえすれば、これだけのことが出来るぞといふ自覺が、彼等の間に生じて來ました。マルクス主義研究会が、啓蒙團體乃至學術研究團體の立場を擲つて、いよいよ實行運動に移るのは、こゝに於いてもはや時機の問題となつたのであります。

その時機は、意外に早くやつて來ました。五・四事件の波紋が全國的に擴がつてゐる真最中、七月二十五日附で、有名な「カラハン宣言」が發せられました。ソ聯邦外務人民委員代理カラハンに依つて、對支不平等條約の撤廢、帝制時代の權益拋棄が公約されたのです。けだしソヴェー

ト・ロシアは、革命當初の豫期に反し、對歐宣傳がうまく行かず、それに國內の經濟的破綻を救ふがために、新經濟政策を採用して、一部資本主義への復歸を餘儀なくされるとともに、歐洲の資本を輸入する必要を生じたので、對歐赤化宣傳の銳鋒を收めて、東方迂回政策を採ることになつたのです。大手から搦手に廻つたのです。そこで先づカラハン宣言を發し、支那上下の對ソ同情を取り結んだといふわけです。さうしてこの宣言を背景とし、表と裏の雙方から、支那に喰ひ入らうと努力しはじめた。表の努力は、ソ支國交開始交渉であり、裏の努力は、コミンテルンがその支部を支那に持たうとしたものです。

コミンテルン極東部長のワートインスキーは、この使命を帯びて、一九二〇年の初め支那に入り、先づ北京で李大釗と會見し、その紹介に依つて南下し、上海で陳獨秀と會つた。陳は五・四事件の少し前、守舊派の壓迫で辭職し、當時北京の盛り場であつて新世界（遊園）の頂上から、共產主義宣傳のアチ・ピラを撒布して檢束されたりして、純然たる共產主義者になり濟ましてゐたが、間もなく上海に南下し、支那共產黨組織の志を懷いて、百方奔走してゐたのでした。かうした環境の陳に取つて、ワートインスキーの南下は、渡りに船であつたわけです。かくて一九二

〇年五六月頃、兩人の歴史的會見が行はれ、その結果同九月、上海佛租界霞飛路漁洋里二號の陳獨秀宅で、中國共產黨が成立しました。出席者はワートインスキー、陳の外陳望道、李漢俊、沈定一、周佛海、楊明齋、戴天仇、施存統、邵力子、張東蓀、張太雷、阮嘯仙等の十餘人でした。しかしこの會合は、結局創立發起人會ともいふべき程度のものであつたらしく、人に依つてはこの會合を認めず、一九二二年七月上海で開かれた黨第一回大會を以て、中國共產黨の誕生と見る向きもあります。コミンテルンでもこの解釋を採つてゐます。さて、第一回大會に出席したのは、廣東陳公博、包惠僧、上海李漢俊、李達、北京張國燾、劉仁靜、武漢董必武、陳潭秋、長沙毛澤東、何叔衡、留日學生周佛海十一代表、コミンテルンからワートインスキー、マーリンで、陳獨秀を中央委員長に、周佛海を同副委員長に、張國燾を組織部長に、李達を宣傳部長に擧げ、はじめて正式の指導部を持つ團體になりました。

三 共產黨と國民黨との提携

黨第一回大會後間もなく、コミンテルンは、當時開會中だつたワシントン會議に對抗する意味

で、イルクーツクに極東弱小民族會議を開催したので、黨は張國燾等三人を代表として派遣したが、これが黨として國際的に活動した第一歩です。

つづいて一九二二年七月、黨第二回大會廣東に開かれ、はじめて政綱を決定しました。その外、香港の海員ストライキ、開港炭坑争議、京漢鐵道罷業を指導したりした。一九二三年六月第三回黨大會開會、中國國民黨との提携の件を可決しました。これは爾後黨の運命に多大の關係のある出來事で、實にコミンテルンの嚴命に依るものです。けれどコミンテルンとしては、中國共產黨の組織は出來たけれど、黨勢は案外振はず、黨の獨力を以てしては、到底目指す支那赤化は覺えないと見たので、支那に於ける急進ブルジョア及びインテリゲンツィアの黨たる中國國民黨との提携を命じたのである。

植民地及び被壓迫民族に對する政策を講究するに當つては、先づ支配的帝國主義國、すなはち植民政策の主體國と、植民地及び被壓迫國、すなはち植民政策の目的國との間には、判然たる區別をつけねばならぬ。兩者に對するコミンテルンの政策は、全然別のものでなければならぬ。植民地及び被壓迫國に於いては、或期間少くとも革命の初期には、その國のブルジョア階級の帝國主義に對する反抗運動を扶けねばならぬ。何となれば植民地及び被壓迫國に於いては、プロレタリア階級の勢力は微弱であり、最先きに外國(壓迫國)の

帝國主義に對して反抗するのは、インテリゲンツィア及びブルジョアであるから、コミンテルン及びその國の共產黨は、インテリゲンツィア及びブルジョアの民主主義革命を助け、これと共同戦線を張ることに依つて、帝國主義國の勢力を減殺し、一方労働者、農民に對して共產主義の運動訓練をなし得るからである。

これがコミンテルンの、「植民地革命の原理」なるもので、この原理を支那に施すに當つて、コミンテルンの利用を待つ急進ブルジョア及びインテリゲンツィアの黨が、孫文以來日本人には御馴染みの中國國民黨であつたのであります。

一九一一年の革命以來、孫文及び中國國民黨が、どういふ風に動いて來たかについては、色々文獻が出てゐるので、こゝには申上げません。要するに失敗の連続で、この上はいかに有害な主義であつても、眼をつぶつて利用しようといふ境地に陥つてゐたのであります。一九二二年の秋、陳炯明に逐はれて上海に引込んだ孫文は、雌伏・沈思の二ヶ月間に、終に一つの反省に到達しました。従來の彼の運動が、その基礎を主として小ブルジョア、知識階級に置き、又自己の利害に依つて反覆なき既成軍閥の武力に依頼して、北伐を遂行することの誤まりを知つたのです。この反省の結果、これまでの革命理論・方法を一變し、労働者・農民を主として民衆を組織し、

全民衆的の組織で國民革命を達成することとし、その手段として、すでに「人民のうちへ！」に手を着けてゐた中國共產黨と握手することの必要を悟つたのだ。それからロシア革命の展開過程から既成軍閥に頼ることを全廢し、大衆を組織・訓練して、黨軍を編成せねばならぬことを知つた。更に又支那に於ける資本主義の勃興が、外國資本に負ふところの多いのに鑑み、帝國主義打倒のスローガンを掲げて、民衆の結束を堅めることの必要なるに考へ及んだ。最後に、以上の諸目的を達成するためには、ソヴェート・ロシアと提携することが、絶対必要であると確信するに至りました。——これが孫文最後の經綸である「聯俄容共政策」であります。すなはちロシアと提携し（俄はロシア）、共產黨員を容納する政策の意味です。

國民・共產兩黨が、相互に對手方を利用しやうとする機縁が熟し、孫文の當時最信用してゐた廖仲愷、ロシア側からは有名なヨッフエ、その推薦で最高顧問として廣東にやつて來たボロディン、共產黨側では陳獨秀、これらの人人を中心として、聯俄容共工作が熱心に進められ終に一九二四年一月になつて、兩黨の提携が成立しました。

提携のステージとなつたのは、一九二四年一月十九日から二十八日まで行はれた國民黨第一回

大會で、この大會で聯俄容共政策が正式に採擇され、民族ブルジョアからプロレタリアート、農民に至るまでの、民族革命階級の共通的要求を網羅した宣言及び政綱が可決され、民主主義革命聯合戦線はここに完成しました。共産黨員で中央委員に指名されたものとしては、李大釗、于樹德（以七中央）、林祖涵、毛澤東、瞿秋白、于方舟、韓麟符、張國燾、（以上同候）の九人、全數の六分の一に過ぎないが、背後にボロディン、陳獨秀が控えてゐるし、聯俄の氣分は濃厚だし、寧仲愷等は行掛り上共産黨系を近附けるし、又黨一切の規範をロシア共産黨に取るといふ建前なので、共産系の中央委員は、この方面の新知識であるから、數こそ少なけれ、いづれも重用され、譚平山は組織部長に林祖涵は農民部長に、毛澤東は宣傳部長代理（本任は汪兆銘）に任せられ、事實上共産系委員が、各方面を牛耳つたことは争はれない事實であります。

共産黨はかうして國民黨内に大きな發言權を獲得し、主義の宣傳と黨勢の擴張に努めました。國民黨が或地方に支部を設立すれば、共産黨もそれ自身の支部を設立するといふ風に。コミンテルンの援助も、兩黨提携後はますます積極的になり、軍費、軍需、武器の供給以外、軍事顧問ガレン（現在極東軍司令官として時めいて）以下數十人の軍事・政治顧問を派遣しました。これらの顧問

連は、ロシアから歸國した蔣介石を援けて、黃埔軍官學校を創立し、蔣が校長となり、ロシア國軍の組織に倣つて、革命主義的軍事教育を施し、黨軍の中堅となるべき人材を養成しました。

共産黨御得意の題目である農民運動も、この時期に於いて着手せられました。農民部長林祖涵は、いくばくもなく陳公博に取つて代られたが、その秘書には共産黨切つての農民問題の權威たる羅綺園が當り、農民運動講習所長毛澤東とともに、農民協會なる形に於いて、極力農民の組織に努めたのであります。

四 革命聯合戦線の決裂

中國共産黨は、かうして合法政黨として明るみへ出、國民黨と結んで民主主義革命聯合戦線を形成し、その推進力となり、政治・労働・農民三運動に、多大の活躍を現はしました。

先づ政治運動についていへば、コミンテルンの援助下に革命武力たる黨軍を養成し、それによつて北伐を遂行し、一九二六年七月、國民革命軍總司令蔣介石出師以來、僅かに九ヶ月にして、孫文在世當時、終に達し得なかつた長江一帯を占領し、一面國民黨極左派及左派と緊密に握手し

て、武漢國民政府を樹立しました。

次に労働運動の方面では、中華全國總工會の組織、一九二五年五月三十日の上海ゼネ・スト（いはゆる五・三〇事件）、對英經濟絶交の指導等が、その重なる業績であります。就中五・三〇事件の重大性は、世人周知の通りでありまして、わが邦支那研究者の左翼は、これを以て眞の意味の支那革命の出発点であると解釋してゐるほどであります。

最後に農民運動としては、さきにもよつと述べた通り、廣東地方を眞先きに農民組織の手を擴げ、農民協會をつくらせ、北伐の進展とともに、新附地方に運動の火の手をひろげ、大きな收穫があつたのであります。

今この三運動昂揚の狀態を、數字に依つて窺ふと左の通りになります。

年次	労働組合員	黨員	農民協會員
一九二五	四五〇、〇〇〇	九九四	二〇〇、〇〇〇
一九二六	一、二〇〇、〇〇〇	一、二〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇
一九二七	二、八〇〇、〇〇〇	五七、九〇〇	九、八〇〇、〇〇〇

かうした昂揚狀態は、しかし永續きしませんでした。その成立以來、もう破れるか破れるかと

疑懼せられてゐた革命戦線に破綻を生じ、國・共兩黨が終に分離したからです。

そのさざしは、兩黨提携の當初からすでにあつたのです。一九二四年には、極右派の馮自由一派が離れて行き、右派の張繼等が反共産黨を聲明したし、一九二五年三月孫文死後、理論的右派といはれる戴天仇が反共的態度を明かにし、同年十月右派と合同の西山會議が開かれてゐます。

一九二六年に入ると、三月二十日の中山艦事件（共産派の暗殺陰謀に先手を）が起つて、蔣と共産派の間に溝が出来、五月蔣から「黨務整理案」が中央會議に提出・可決。これは共産系が各部長たることを禁じたものです。これで蔣と共産派の間はますます悪くなり、爾後（一）蔣の戴天仇登庸、（二）陳獨秀の北伐反對、（三）共産派の張靜江攻撃、（四）國民黨黨部及國民政府の北遷問題に関する意見の相違となつて、もうほとんど救ふことの出来ない境地に逐ひ込まれ、一九二七年二月武漢政府が成立すると、三月同政府は國民革命總司令蔣介石の職を免じて、軍事委員會の平委員にし、彼から軍權を奪つてしまひました。蔣はこれに對して最後の決心を下し、四月十二日上海クーデターを敢行して、「清黨」（共産派）を聲明し、同十八日南京政府を樹立しました。

蔣の右翼陣營移行後、武漢政府は左派（汪兆銘等）、極左派（鄧演達等）、共産派のブロックでありました。

が、これも農民運動問題を原因として分裂し、七月中旬共産派及び極左派が武漢政府を退出し、民主主義革命聯合戦線は、ここに完全に破綻したのであります。

戦線決裂の原因となつた農民運動問題を、補足的に略述して置きます。一九二六年十月に、中共（中國共産黨の略稱。）はコミンテルン代表指導下に、黨最初の農業綱領が出来たが、具體的分析の上に立つ農業綱領は、一九二七年四月五月の中共第五回黨大會ではじめて制定せられたといつていい。この時陳獨秀等は右傾的態度を持ち、コミンテルン一九二六年十二月決議の指摘した、反革命者の土地没収以上に進む必要なしと主張したが、羅綺園、彭湃等の中共左翼分子は、小地主をも含む一切の土地没収を主張した。結果は右派の勝に歸し、大地主のみの土地没収を主眼とする綱領が作成せられたのです。しかし左翼影響の下に在つた湖南農民の一部は、こんな農業綱領なんかは頓着せず、小地主をも含む土地没収をやつてしまつた。ところが湖南での被害者中には、湖南派軍人の縁故者が多かつたので、彼等是一致して反共産的態度に出で、五月十八日唐生智部下の夏斗寅が、武昌附近で兵變を起し、二十一日夜同じく唐部下の長沙團長許克祥がこれに應じて起ち、共産派を一掃しました。共産派は躍起となつて許の處罰を叫んだが、左派の牽制、

湖南派の武力威壓で、有耶無耶の間に葬られました。

武漢白化の報に接して、コミンテルンは氣が氣でなく、六月初旬、當時武漢滞在中であつた代表ロイに宛て、（一）土地國有即時實行、（二）中共黨員二萬、勞農五萬を武裝せよといふ密電を發しました。支那事情に通ぜず、武漢白化の形勢に盲目で、左派の態度を認識しない印度人ロイは、六月十五日人もあらうに左派首領汪兆銘にこの密電を見せたものです。流石の汪も終に目が覺め、二十三日「國民革命の領導權は國民黨に在る。」といふ宣言を發し、譚延闓とともに兩黨分離を強硬に主張しました。刻刻變化する情勢を知つて、コミンテルンはやむなく方針を變更し、中共黨員の武漢政府示威退出を指令し、それを奉じて共産系の武漢退去となつたのであります。

五 共産軍及びソヴェート起る

中共の成立した一九二〇年九月から、國・共兩黨提携の出来た一九二四年一月までの三年三ヶ月を、黨の「雌伏時代」とすれば、それから一九二七年七月の國・共決裂までの三年七ヶ月が「昂揚時代」であります。今や黨は本來の面目に立ち歸り、一時權宜の策である聯合戦線から退き、

純然たる共産革命の遂行を志すに至つたから、これを「甦生時代」といふことが出来ませう。さうしてその出發點となつたのが「八・七會議」です。

コミンテルンの見解に従へば、武漢に於ける失敗は、中共幹部の日和見主義に在るといふのです。黨幹部陳獨秀、譚平山、コミンテルン代表ボロディン、ロイ等が、國民黨左派との決裂を恐れ、極左分子を抑へて微温的な農業決議を採擇し、極左分子及び農民の直接行動を阻止し、反動派軍人の跋扈を制し得ず、日和見主義の過誤に陥つたことが、失敗の原因だといふのであります。目前の黨の任務は、この日和見主義を清算し、農民武装暴動に依る農業革命を實行することなればならぬ。この見地の下に、一九二七年八月七日、コミンテルン新代表ロミナーゼ指導の下に開かれたのが、いはゆる八・七九江會議であります。

この會議に基づき、黨員は各省に潛入して勞農運動を煽動しました。上海では黨中央の指令に據り、八月中旬から十二月にかけ、外支人經營企業に罷業を勃發させ、宜興、無錫、長沙等には農民及び労働者の暴動、罷業があり、農民運動の方面では、湖南に於ける毛澤東が最も優れた指導者でありました。秋の收穫を指しての暴動だから、これを「四省秋收暴動」といふのであり

ます。

しかし、これらの暴動は、結局失敗に終つたので、黨中央は十一月會議を開き、政治決議、土地問題黨綱等を採擇し、左傾派の譚平山を除名しました。政治決議に於いて、はじめてソヴェート建設を呼號し、土地問題黨綱に於いて、はじめて小地主をも含む一切の土地所有權を否認したことは注目の價値があります。

十一月會議の趣旨はただちに實行せられ、同月十七日彭湃指導の下に、海陸豊ソヴェートが樹立せられ、翌年三月まで持ちこたへました。これが支那最初のソヴェート区です。つづいて十二月十一日に、有名な「廣東コムミュン」(廣州)が、勃發しました。八・七會議後廣東の左傾労働者は黨南方局及び廣東省委員會(主席張)指導の下に廣東の武力奪取を計畫してゐたが、十月武漢地方から歸還した張發奎軍が、十一月十七日廣東にクーデターを斷行して李濟深を驅逐し、李の廣東奪回に備へるため多くの軍を戦線に出し、市内の防備手薄となつたに乘じ、太雷は甘言を以て發奎に説き、發奎軍援助を條件として入獄中の罷工労働者一萬二千、黨員七百を釋放させ、十二月十一日武装暴動を以て公安局その他の機關を占領し、十二日廣州ソヴェートを樹立し、蘇

兆徴を主席に推したが、十三日李福林軍に撃破され、太雷戦死、僅か五六百名が海陸豊に逃げただけで、全部武装解除、五千餘名銃殺されました。ロシア領事館捜査の結果、背後にロシア官憲があつたことが判明し、南京政府は十五日ロシアと断交しました。

この「革命退潮期の殿戦」を最後の閃光とし、黨は地底に没し去り、一九二八年上半期では、僅かに四月、朱徳、毛澤東に依つて共産軍第四軍が、五月彭徳懷の叛變に因つて同第五軍が成立したくらのことでしたが、コミンテルンでは二月第九回執行委員会プレナムを開き、「支那問題決議」を採録しました。過去半年の経験に照し、(一)勞農運動の並進を期し、(二)近き將來の革命高漲に備へ、機會主義的闘争を避け、大衆獲得に全力を注ぎ、これをソヴェートに組織し、(三)ソヴェート區域では紅軍支隊組織を主務とすべしと述べてゐます。

右決議の趣旨は、八月モスコで開かれたコミンテルン第六回大會で展開・深化されました。中共第六回大會も同時に開かれました。これは黨あつて以來最大規模の大會で、九つの決議及び黨の章程が決議されました。中心課題は、(一)八・七會議以後の革命の敗北及び闘争の経験に基づき、右翼的及び極左的偏向を克服すること、(二)革命の一次的退却時期を正しく評價し、新時

期に於けるレニン主義の方針を確立すること、(三)眞に革命的な農業綱領を作成することの三つでありましたが、大會はこの課題を果し、根本任務として、(A)地主階級の排除と徹底的土地革命の實行、(B)帝國主義驅逐と支那統一の完成、(C)武装暴動に依つて反革命資産階級たる國民黨政權を打倒し、ソヴェート制を建立する。の三つを、又政綱として次ぎの十項を決議しました。

- (一) 帝國主義打倒。
- (二) 外資に依る銀行等一切企業の沒收。
- (三) 支那統一、民族自決權承認。
- (四) 軍閥、國民黨政權打倒。
- (五) ソヴェート制建設。
- (六) 八時間勞働制、賃銀増加、失業者救済、社會保險實行。
- (七) 一切の地主の土地沒收、耕地を農民へ。
- (八) 兵士生活の改善、土地と職業を兵士へ。
- (九) 一切の軍閥課税の廢止、統一累進稅法實施。
- (一〇) プロレタリアート及びソヴェート・ユニオンとの聯合。

第六回黨大會から、一九三〇年五月まで、約二年間の中共の活動は、共産軍の結成、及びソヴ

エートの樹立に盡きるやうです。共産軍といへば、國共分離直後の南昌暴動に参加した賀龍、葉挺軍が鼻祖といはれるが、眞の意味の共産軍は、毛澤東・朱德兩支隊の合同に依つて成立した第四軍がそれです。八・七會議後、郷里湖南省湘潭地方で農民暴動を指導した毛澤東は、その經驗から、農民バルチザン隊組織の必要を痛感し、三千を組織して江西に入りました。一方朱德は、賀葉軍南征失敗後、雲南同郷の范石生の部下の團長になり、碇石鎮に駐屯してゐたが、廣東コムミューン後兵變を起し、湖南南部から江西南部に遊撃し、毛と合して井崗山に據つたのです。これが後に朱・毛軍として、世界的に名を知られるやうになつた主力軍です。

朱・毛が井崗山に據つたとの報が傳へられると、風を望んで各地に共産軍が成立しました。彭德懷、黃公略、許繼慎、鄒繼勛、賀龍、方志敏各軍を合して、十二軍一團、兵數七萬五千、銃四五萬挺の共産軍が、一九三〇年四月までに出來、その遊撃に依つて、所在にソヴェート區が發生し、その大なるものは、江西全省ソヴェート、閩西ソヴェート、湘鄂革命委員會、東江革命委員會の四政府をはじめ、相當基礎鞏固なるもの少くないので、一九三〇年五月、上海郊外に「中國ソヴェート區域代表大會」開かれ、七月、彭德懷を主力とする共産各軍は、湖南省城長沙を占領

(十數日間)し、全世界はここにはじめて支那共産軍の恐るべきことを知つたのであります。(續)

六 ソヴェート共和國中央政府の樹立

ソヴェート區が各地に出來、その基礎が鞏固になるに連れ、ソヴェート大會を開いて「中華ソヴェート共和國」を建設しようといふ希望は、一九三〇年からあつたのでありまして、同年五月の中國ソヴェート區域代表大會(前項)でも、その旨を決議したものです。それに基づいて準備委員會が出來たのが、一九三〇年秋。事務所を上海共同租界三馬路の中山旅舎といふのに設けてゐたが、工部局警察に探知され、一九三一年一月手入されました。黨中央は同年二月七日の「二・七紀念日」(京漢鐵道罷業)を開會期に豫定してゐたのですが、手入れのため無期延期となり、所詮上海では開會覺束ないと見たのか、江西のソヴェート區内に開くことに方針を變へ、臨時政府準備委員會を組織、中央政治局委員項英を主席に任命し、江西に潜入させました。

同年秋、黨總書記陳紹禹以下周恩來、張國燾等の幹部が江西南隅の瑞金に入り、十月二十五日までに各地代表が參集し、十一月十日からいよいよ「中國工農兵蘇維埃第一次代表大會」が開か

れました。「蘇維埃」はソヴェートの音譯です。

當日は江西中央ソヴェート區、福建西部區、河南安徽省境區、湖南江西省境區、江西東北區、湖南湖北西部省境區、海南島、及び共産軍の各代表、並びに中華全國總工會、海員代表等二百九十名出席、朝は共産軍の檢閲をやり、午後開會、主席團三十七名、名譽主席團四名を選擧して議事に入り、憲法、土地法、勞働法、經濟政策決議、紅軍決議、少數民族決議、工農檢査決議、政治決議、對外宣言、時局宣言、工人及び勤勞大衆に告ぐるの書、全支革命團體への通電、全國紅軍兵士への通電、全世界無産階級への通電、米國勞働者への通電を採擇しました。中央執行委員としては、主席毛澤東、副主席項英、張國燾以下六十一名當選しました。

十一月二十七日第一回中央執行委員會を開き、人民委員會を組織し、毛澤東を主席、項英、張國燾を副主席、王稼靑を外交、張鼎丞を土地、瞿秋白を教育、周以粟を内務、張國燾を司法、項英を勞働、朱德を軍事、鄧子恢を財政各人民委員に、何叔衡を工農監査委員長に、鄧發を國家政治保衛局(ウ・ベ)長に任命し、いはゆる中華ソヴェート共和國臨時中央政府がここに成立したのであります。黨成立以來實に滿十一ヶ年でありました。

大それた「中華ソヴェート共和國」などいふものを、中部支那の心臓部につくられて、いやしくも支那の最大部分を支配する蔣介石及び南京政府が、これをテレッツとして見てゐられるものではなく、一九三〇年七月の長沙コムミュン後、第一回の共産軍討伐をはじめ、爾來今日まで、五回に亘る討伐を繼續し、終に共産軍を西北支那に追ひ詰めたのであります。その經過をこれから述べるのですが、その前に、叙述の便宜上、一九三四年の一月二十二日から二月七日まで、瑞金で開かれた第二回ソヴェート大會のことをここに述べて置きます。

第一回大會から一年半の後、一九三三年の六月に、黨中央は會議を開き、同年十二月十一日の廣東コムミュン紀念日を以て、第二回ソヴェート大會を開くことを決議し、それに基づき中央ソヴェート政府の名を以て、大會召集宣言を發しました。しかし南京政府軍の討伐に依つて、代表選擧が妨げられたので、豫定通り開會することが出来ず、一九三四年に入つて、やつと開會の運びとなつたのです。出席代表六百九十三名、中國ソヴェート中央執行委員會主席毛澤東の「三年來中央執行委員工作報告」、朱德の「紅軍建設報告」、林伯渠の「ソヴェート經濟建設報告」、吳亮平の「ソヴェート建設報告」、劉少奇の「二年來ソヴェート區勞働組合運動報告」を採擇し、大

會宣言を可決し、中央執行委員會及び人民委員會を改選しました。この中で毛澤東報告は歴史のもの、六號ベタ組み判四五十頁に及ぶ長文のもので、

新中央執行委員は百七十二名、主席毛澤東、副主席項英、張國燾。主席團は右三人の外朱德、瞿科白、張聞天、周恩來、秦邦憲等十七人、これが最高幹部です。

人民委員會も改選せられました。主席張聞天の下に、外交王稼高、軍事朱德、勞働鄧振詢、土地高自立、財政林伯渠、國民經濟吳亮平、糧食陳潭秋、司法梁伯臺、內務曾山、教育瞿秋白、農工検査項英の十一委員があり、各「何々人民部」と稱し、人民委員の下に有力な中央執行委員が配屬せられ、別に中央審計委員長に阮嘯仙、臨時法院長に董必武が任命されました。

七 第一——五次討伐

ソヴェート區及び共產軍に對する國民政府の討伐は、前述した通り、一九三〇年から今日まで、五回に亘つて行はれました。丸六年間もみ抜いたのですから、詳しく書けばきりがありません。しかしその経過を、今日から振り返つて見ると、實は大して興味がありません。何月何日共產軍がど

こを占領した、討伐軍がいつそれを恢復したといふやうな叙述は、煩はしい限りですから、駆け足で通り抜けたいと思ひます。

一九三〇年七月の長沙コムミュン（前述）は、それまで黨軍を輕視してゐた國民政府を反省させ、同年十二月第一次討伐が開始されました。蔣介石自づから江西の廬山に出馬し、湖北、湖南、安徽三省主席を集めて討伐を議し、張輝讚師團を主とする三省部隊を動員したが、却つて大敗しました。

ここに於いて一九三一年二月第二次討伐軍を起し、軍政部長何應欽が三個師團を率ゐて江西の山岳地帯に向つたが、五月になつてこれも失敗。

第三次討伐は同年七月開始、蔣自から出馬し、三十萬の軍を動員した結果、重要根據地である東固を恢復しましたが、長江水災等のため、それ以上の効果を擧げることが出来ず、九月一先づ打切りとなりました。

つづいて滿洲事變が勃發し、討伐が一時不可能となつたのに乘じ、共產軍及びソヴェート區は、休養期間を得てますます鞏固・強大となり、一九三二年の初めに於いては、（一）中央ソヴェート

區、(二)江西湖南省境區、(三)江西東北區、(四)湖北河南安徽省境區、(五)湖南湖北西部省境區、(六)湖北南部區、(七)湖北西部區の七大ソヴェート區、この合計ソヴェート縣數八十餘になり、共產軍兵力二十萬と推定せられる程になりました(ソヴェート縣數に關し、日本に於ける支那研究者の左翼は、これを約四百と計算し、兵力三十餘萬説を主張し)就中蔣介石を心配させたのは、前記湖北河南安徽省境區、湖南湖北西部省境區、湖北南部區の三大ソヴェート區に依つて、中部支那の中樞である武漢地方が、半永久的に包圍せられてゐたことでした。

で、彼は上海事件が一段落になると、驟然として第四次討伐軍を起し、一九三二年七月から十月中旬まで、三路八十一師、二十九旅、三十九團、六十三萬の兵力を動かし、洪湖、七里坪、新集、黃安、金家寨、龍港、蕪湖等、三ソヴェート區の重要根據地を恢復し、一方江西北部を壓し、福建に侵入した共產軍を廣東に逐ひ込み、廣東軍がそれを江西の古巢に追ひ戻すといふ風に、第四次討伐は、これまででない順調に終つた。しかし湖北河南安徽省境區の徐向前軍は、河南・陝西に一千二百哩の遊撃線を描いて四川東北部に新ソヴェート區を創建し、湖南湖北西部省境區の賀龍軍は、これ亦河南、陝西、四川に一千六百哩を突破し、湖北西部區に落附くことが出来たし、

湖北南部區の孔荷龍軍も、江西に入つて行き、差引き武漢の包圍を解いたことだけが、討伐軍側の收獲だつたといへるのです。

第四次討伐に成功した蔣介石は、一九三三年に入ると、第五次討伐を開始しました。前四回の討伐の經驗に依つて、蔣は、兵力のみが成功の要素でないことを悟り、「政治七分、討伐三分」のスローガンを掲げ、尙又攻撃に際しても、極力深入りを戒しめ、急進して失敗するよりは、ジリジリ押しに進んで、得たところを失ふまいとすることに力を注ぎました。そのために「碉堡政策」を用ひました。碉堡といふのは小さい望樓兼堡壘です。共產軍の貧弱な武器に對しては、これでも充分だつたのです。かうして「穩打政策」すなはち緩進主義に終始したので、一九三三年に於いては、攻撃の主目標たる江西四ソヴェート區で十三縣を恢復することが出来たけれども、徐向前の四川陝西區は強化され、賀龍の湖北西部區も擴大され、湖北河南安徽省境區も小規模ながら再建され、ソヴェート縣數に於いては、却つて増加を見るといふやうな状態でありました。

第五次討伐の第二年、すなはち一九三四年の一月から二月にかけて、第二回ソヴェート大會が開かれたことは、前述した通りです。——花やかだつた大會、それは燈火の消えようとする前の

明るさでした。蔣が丸一年間齒を喰ひしぼつて辛抱した効果は無駄でなかつた。討伐軍の穩打に依つて、一たび恢復された地點は、もう容易に再び共産軍の手に入らず、勝手が違ふと狼狽してゐるうちに、四月二十八日中央ソヴェート區の北の關門である廣昌と、南の關所である筠門嶺が、ほとんど同時に討伐軍に占領されました。これが没落のはじまりで、江西東北區の橫峰、江西湖北湖南省境區の小源、いづれもその區の最重要根據が陥落し、中央ソヴェート區の方も驛前、白水、石城、興國、寧都、汀州の諸要害が順次に失はれ、十一月十日討伐軍の李默庵師は、待望の赤都・瑞金に入城しました。

六年の久しき、共産軍に依つて占據せられてゐた江西は、かくて討伐軍の手に歸し、中華ソヴェート共和國時代(一九三四)はここに終焉を告げ、共産軍の再遊撃時代に推移したわけです。

八 共産軍の西北集結

赤色首都瑞金の陥落は、支那赤白對抗史上の一大轉機であります。本據を失つた共産軍は、數條の遊撃線を描いて西北支那に移動し、一九三六年末までの丸二年間に、西北支那への集結を終

りました。本稿起草の頃(一九三六年十二月)には、毛澤東・徐海東軍が甘肅西北部に、朱德・徐向前軍が同中部に、賀龍・羅炳輝・蕭克軍が同東北部に集中してゐました。兵力も大分減少し、十萬そこそこと見られ、ソヴェート縣數も、五十以上には算へられず、それに黨も軍事偏重主義を揚棄して、抗日聯合戦線組織に力を注ぐやうになつてゐるし、共産軍の重要性は、一見減少してゐるやうに思はれるのですが、東亞局勢變化の日に於ける、「總豫備隊」としてのその可能性を思ふとき、まだまだ輕視することは出来ませんので、簡単に西北集結の經過を辿ることにしませう。山西侵入などといふ、かなり重要な動きをも、中に含んでゐるので……。

西北への移動は、瑞金陥落の二ヶ月も前から行はれてゐたのです。江西西北部にゐた蕭克軍は、先發隊として一九三四年八月上旬根據地を離れ、湖南南部、貴州東部を通つて、十月下旬湖南極西部で賀龍軍に合流しました。これが賀・蕭軍です。

主力軍である朱・毛軍は、十月二十日頃西進を開始し、蕭軍コースの少し南側を通過し、貴州東部に出て、一九三五年一月烏江を渡つて遵義一帯に占據しました。

この外に、江西東北區の殘軍である方志敏軍は、劉仇西・尋准洲軍と一緒になつて、「北上抗

日」の旗印しの下に、福建北部から浙江南部に遊撃しましたが、方と劉は捕縛され、尋は討死し、殘軍は劉英・粟裕が率ゐて、浙江南部に分散し去つたし、湖北河南安徽省境區を再建した吳煥先・徐海東軍は往年の徐向前コースを辿つて陝西南部に入つたし、江西に残つてゐるものには項英、陳毅、徐彥剛指揮の三萬五千があり、四川陝西ソヴェート區に徐向前・張國燾軍が、陝西甘肅區に劉子丹軍が頑張つてゐました。従つて一九三五年の初めに於けるソヴェート區及び共產軍の態勢は、八遊撃區、十三萬共產軍といふところでした。

この態勢が、一年後の一九三六年初に於いては、四遊撃區・十萬共產軍に變化しました。どうしてこんな變化が生じたか？ 以下この一年間の遊撃状況を略述して、それを明かにさせよう。

主力軍たる朱・毛軍は、一九三五年一月下旬貴州西北隅の土城一帶に集結したが、討伐軍が追ひついて來たので、二月上旬雲南北部に逃げ、月末再び遼義地方に占據しました。この地方の爭奪戦が三月中旬までかかつたが、形勢重大の報に接した蔣介石が、貴陽に飛ぶより早く、朱・毛軍は遼義—貴陽大道を南下し、合計五萬を集出し、貴陽攻撃に着手しました。これに對する蔣介石は、中央・貴州兩軍七萬五千に飛行機十三臺、戦は四月三日から五日までだつたが、結果は朱・

毛軍の敗北。今度は貴陽の南を西行し、雲南境の八縣を占領、二十七八日頃、雲南省城・昆明の東六七縣に據つたが、雲南側の防備奏效して省城は抜けず、五月十日金沙江を渡河し、六月上旬西康省に侵入して瀘定を圍んだが、これも抜けず、大渡河を渡つて漢源、榮經一帶を席捲し、六月十五日四川の懋功、天全一帶で徐向前軍と合流しました。江西出發以來八ヶ月で、彼等は四川集中の課題を果したのであります。

徐向前軍に西進の指令が達したのは、三月上旬でした。直ちに行動を起して月末嘉陵江を突破し、二ヶ月かゝつて六月上旬理番、懋功一帶に達し、主力軍と合流したのです。

合流した共產軍は、一先づ毛兒蓋に集結し、こゝで今後の進路について協議したところ、毛澤東の北進論、すなはち甘肅を経て新疆に向ふべしといふ論と、張國燾の南下説、すなはち四川、西康省境に據るべしとする説とが對立したが、一應毛の言分が通り、白龍江の南岸まで進んだ時、この兩論が再燃し、今度は妥協が出來ず、合流三ヶ月足らずで、共產軍は再び分裂しました。

分裂後毛澤東、林彪、彭德懷等は白龍江を渡つて甘肅に入つたが、新疆入りは結局不可能と見込みが立つたので、轉じて陝西北部に入り、劉子丹軍の根據地である陝甘ソヴェート區に入りま

した。こゝには劉軍の外、九月上旬徐海東軍がすでに占據してゐたので、結果は毛・徐・劉三軍の合流となりました。

一方南下隊は朱德、徐向前、張國燾等で、一旦古巢の毛兒蓋に落附き、十一月上旬來南下して四川・西康省境地方に新根據地を形成しました。

これに合流すべく行動を起したのが賀・蕭軍で、十一月から一九三六年二月まで貴州を遊撃し、終に同省畢節地方にまで達しました。

かくて一九三六年初の態勢は、略々左表の如くなつたのであります。

區・軍名	領 導 者	想定兵力
陝 甘 區	毛澤東・彭德懷・林彪・徐海東・劉子丹	三〇、〇〇〇
川 康 區	朱德・張國燾・徐向前・羅炳輝	三〇、〇〇〇
賀 蕭 軍	賀龍・蕭克	二〇、〇〇〇
殘 匪	項英・陳毅・徐彥剛・劉英・粟裕・黃立貴・高俊亭	二〇、〇〇〇

陝西北部に集結して、北支赤化の中樞を形成してゐた毛澤東・徐海東軍は、一九三六年二月山西に侵入し、騷擾約三ヶ月、五月再び陝西の古巢に歸りました。侵入軍は總數二萬二三千、その

うちの五十パーセントが基本共産軍で、三十パーセントが陝西土着の急ごしらへ部隊、残り二十パーセントが舊東北軍からの投降部隊でありました。

二月十七日山西石樓縣の、黄河を挟んだ對岸に、二百餘の先鋒隊が現はれたと見る間に、忽ち結氷を渡つて山西側に入つて來ました。同二十一日頃までに約六千、石樓、中陽、離石三縣が先づ陥落。三月十日頃には、兵力二萬二三千となり、占據地域も十三縣からなつてゐました。同二十日頃が最も猖獗した時期で、占據地域約三十縣。山西西南部の富饒の地を、ほとんど全部取られたといつても過言でなく、省の約三分の一が赤化されたわけです。

防衛する側の山西軍は、總數五萬だが、省城の太原や、同蒲鐵道守備のために、多少の兵力は残さねばならず、前方作戰には三萬しか使へない。これではとても共産軍討滅は望めません。といふのは、精銳を誇る中央軍ですら、少くも五六倍の兵力を持たねば、討伐出來なかつたからですから、山西軍を以てしては、十倍以上なければ駄目なのです。

そこでどこからの救援が必要になつたが、冀察政權には餘力なく、山東の韓復榘も長鞭馬腹に及ばないので、結局中央軍の山西入りとなりました。その數七ヶ師四萬、これに商震軍二ヶ師

一萬、合せて五萬が入つて來、江西での討伐で勇名を擧げた陳誠が、武漢から飛んで來て第一路軍(中央)總指揮になり、山西軍と商震軍とで第二路軍をつくり、山西の楊愛源が總指揮になりました。飛行機が十九臺(中央十三、山三)。

かうした御膳立てが、三月十日頃までに出來上つたが、流石にそれから共産軍の勢ひも下火となり、三月末には大部分の共産軍が陝西に歸り、南部に五千、太原西北地區に二千、合計約七千が殘留するだけになりました。一方討伐軍は、その十倍以上になつたのですから、もはや大勢は決したといつてよく、果然五月上旬までに、共産軍はほとんど全部山西を引揚げてしまひました。

山西侵入の顛末はこれくらゐとし、その後の各軍の動きを見ませう。一九三六年二月貴州畢節地方に達した賀・蕭軍は、二十六日同地を抛棄して雲南に入り、三月十二日鎮雄、南下して宣威、馬龍、尋甸、嵩明を経て、雲南省城・昆明の北を通り、四月中旬祿豊に達しました。これから尙西進し、下旬賓州に着、月末金沙江を渡り、五月五日頃西康省に侵入し、七月上旬には襄塘、巴安地方に現はれ、懷柔附近で朱德・徐向前軍と合流しました。それから甘孜に進んだが、そこで朱・徐軍と別れ、大雪山、大金川を越えて青海省白衣寺に達しました(七月二)しかし馬步芳軍に

撃破されて、一旦四川に退き、九月中旬甘肅岷縣を攻撃、東進して同月下旬甘肅東南部の成縣、徽縣、兩當地方に落附いた模様です。

甘孜で賀・蕭軍と別れた朱・徐軍は、甘肅岷縣から臨洮を占領し(九月十日)、たゞちに蘭州攻撃に移つたがモノにならず、臨洮に引返し、十月上旬甘肅中部の鞏昌、通渭一帯に進出しました。

山西から逐はれた毛澤東、徐海東、林彪、彭德懷各軍及び陝北の劉子丹軍は、五月下旬までに陝西の安塞地方に集中し、それから西進して寧夏に侵入し、中衛、金積、靈武、鹽池一帯に占據しました(六月)。九月、毛澤東軍は甘肅の海原、會寧に南下して、朱・徐軍と合流しようとしたが、討伐軍に阻止され、十月上旬甘肅東部の豫旺、環縣一帯に集結しました。徐海東軍も同じ頃環縣に着きました。

かくて一九三六年末に於ける共産軍は、甘肅西北部、同中部、同東南部の三地方に分駐し、小規模の遊撃をつゞけてゐる状況で、あまり活潑な動きを見せて居りません。

九 新戦術—抗日聯合戦線

瑞金政府の樹立された一九三一年から、それが潰れた一九三四年までを「中華ソヴェート共和国時代」といへると思ふが、この時期に於ける一大特徴は、軍事偏重主義でありました。無理もありません。共産軍はたしかに優勢だったのです。南京政府の大量になつての宣傳に拘はらず、共産軍の討伐はなかなか進捗せず、ソヴェート區の基礎はますます鞏固に赴いたやうに、外からは觀られてゐたのです。獨りコミンテルン及び中共の宣傳文獻が、共産軍の優勢とソヴェートの鞏固を傳へただけでなく、外國側の冷靜な批評も、討伐の困難を擧げて、悲觀的論調を以て臨むものが多かつた。論より證據、試みに一九三三年頃に書かれた多くの論文を見るがいゝ。討伐の成功を確言したものは、ほとんどなかつたといつてもいゝくらいです。局外者でもこんな状態であつたのですから、局中のコミンテルン及び中共が、まだまだ軍事に依存して充分やつて行けると思惟したのは、全く無理のないところです。

見込みは外れました。執念深い蒋介石の討伐は、一回は一回よりも深刻になつて來、朝に一城、夕に一壘といふ風に、網はジリジリ狭められて來ました。さうして終に瑞金の陥落となりました。こゝに於いて、否、中央ソヴェート區が最後の六縣くらゐに縮まつた時、既に、黨及びソヴェー

ト中央は、もう駄目だと觀念したのです。さうして蕭克軍を先頭に立て、一路西漸を開始したのであります。

西漸ははじめたものゝ、しかし彼等はまだ全く絶望はしませんでした。或程度退けば、踏みとどまり得るであらう。そこに第二の江西を開きすればいゝ。かう考へたものと思はれます。そこでコミンテルン及び中共は、退却は戰術的のものだと宣傳し、極力共産軍の盛り返しを希望したのです。だが、これも空頼みでした。蒋介石のいはゆる「追剿」は、意外に迅速で、共産軍御得意の逃げ足を以てしても、やゝもすれば追ひつかれさうになる。ますます足を早めてたうとう四川まで來て、ホット一息吐いて見たら、出發の時五六萬もあつたのが、一萬そこそこになつてゐた（朱・毛軍が徐向前軍と合流した時、）などいふ、彼等に取つての悲劇が、一再ならず演ぜられたのです。

こゝに至つて流石のコミンテルンも、中共も、軍事依存の不可を悟つたのです。何等かの新方針、新戰術を案出して、この窮境を突破せねばならぬ。莫斯科にゐる中共代表團の主席陳紹禹、團員李立三等が、コミンテルン幹部と膝つき合せて、談合した結果、ハタと膝を打つたのは、「昔戀しい聯合戦線」の復活であります。一九二四―七年の國民黨との提携時代の再現であります。

軍事偏重主義を揚棄しよう。改めて第一歩からやり直さう。何等かの共通意識を掴んで、それを旗印にして支那の大衆を再組織しよう。——かう決心した彼等の眼に映じたものが何であつたでせうか？ いふまでもなく全支に澎湃たる抗日意識であります。

彼等にとつて幸ひなことには、この抗日運動に關しては、彼等は常に一石を下すことを忘れてゐなかつたのです。彼等はあらゆる機会を捉へて、對日宣戰、抗日宣言の類をばらまいてゐたし、種々の表現團體をこしらへて、抗日運動の實踐をやつてゐたのです。試みにその重なるものを舉げませう。

(一) ソヴェート中央の一九三二年四月二十六日附對日宣戰通電。

(二) 黨中央の同年九月十八日附對日宣戰通電。

(三) ソヴェート中央の一九三三年一月十五日、三月四日、四月十五日の三回に亘る抗日宣言。

(四) 一九三三年三月成立の『國民禦侮自救會』は、宋慶齡（孫文未亡人）を表看板とする中共表現團體です。

(五) 同年九月三十日第二回世界反戰・反ファシスト會議が上海に開かれました。

(六) 同年十一月、瑞金政府と福州人民政府との間に、『抗日反蔣初步協定』が締結されました。

(七) 一九三四年に入つて、表現團體『國民武裝自衛委員會』が成立しました。

かうした先例を回顧した陳紹禹等は、よし、此等一系の運動・理論を調整・統合し、抗日の旗印の下にインテリゲンツィア、小ブルジョア、及び労働者を再組織し、國民黨をして「容共」を餘儀なくさせ、一九二四―七年を再現させようと、一九三五年七月―八月のコミンテルン第七回大會を前にして、評議を一決したのであります。

新方針・新戰術決定のステージたるコミンテルン第七回大會は、かくて一九三五年七月二十五日から八月二十日までモスコウで舉行されました。六十五支部代表五一〇名（表決權三七一）出席八月二日大會の最重要題目と看做された「ファッシズムの勃興、及びファッシズムに對する労働階級統一のための闘争に於けるコミンテルンの任務に關する報告」がデイミトロフによつて行はれ、十二日まで討論、七十六代表の演説があり、十二日これに對してデイミトロフ結論を述べ、二十日大會決議として採擇されました。この報告及びこれに對する大會の決議こそ、コミンテルン抗日指導の最高原理、根本方針であります。報告中「植民地及び半植民地に於ける反帝統一戰線」の項に於いて、デイミトロフは次のやうに演述してゐます。

國際情勢及び國內情勢の變化に關聯しすべての植民地國及び半植民地に於いて非常なる重大性を獲得したのは反帝統一戰線問題である。この戰線の創設のことに當つては先づ大衆の反帝闘争行はるゝ事情の多種多様なること、民族解放運動の成熟程度、同運動に於けるプロレタリアートの役割、及び一般大衆に對する共產黨の影響相異あることを考慮にいれなければならない。支那ではその民族運動によつて廣大な地域のソヴェート區が創建せられ、強力な赤軍が組織せられてゐるが、日本帝國主義の掠奪的侵略及び南京政府の賣國行動により支那國民の民族的存立が脅威せられつゝある。この時にあたり帝國主義諸國による支那の奴隸化及び分割に對する闘争の統一的中心となり、支那國民の民族闘争のためすべての反帝國主義的勢力を糾合する統一的中心となつて活動し得るは、唯支那ソヴェートがあるのみである。故に我等は苟くも自己の國土及び自己の國民を救ふための闘争をなす用意ある、支那領土内現存の組織勢力全部を糾合し、もつて日本帝國主義及びその手先たる支那人に對する廣汎なる反帝統一戰線の結成を提言した中國共產黨に全然同意するものである。我等は幾年もの闘争で試練せられた英雄的支那赤軍に熱烈親愛な挨拶を送ると共に、凡ての帝國主義的侵略國及びその手先から支那國民を完全に解放する闘争を支持する堅き決意あることを、支那國民に確言するものである。

右に對する決議第五項に左の如く掲記されてあります。

植民地國及び半植民地國に於ける共產黨員の最重要任務は反帝人民戰線の創設作業である。これがために

は最も廣大なる民衆を益々増大する帝國主義的搾取反對、殘酷なる奴隸化反對、帝國主義諸國驅逐及び國土獨立の民族解放に誘引し、民族改良主義派の指導する反帝大衆運動に積極的に参加し、具體的、反帝的綱領に基き民族革命及び民族改良主義團體との共同動作を達成しなければならない。支那に於いてはソヴェート運動の擴大及び赤軍戰闘能力の強化を全國に於ける人民反帝運動の展開と結合しなければならない。この運動は帝國主義的壓迫者、就中日本帝國主義及びその支那從僕に對する民族解放闘争なるスローガンによつてこれを遂行しなければならない。諸ソヴェートは解放闘争に於ける全支那國民の統一的中心たるべきである。帝國主義諸國のプロレタリアートは、各自その解放闘争のため帝國主義的侵略者に對する植民地及び半植民地國民の解放闘争を百方支持しなければならない。

デイミトロフ報告の討論に際し、中共前總書記、現モスコイ駐在代表團主席で、黨隨一の理論家である陳紹禹は八月七日「植民地、半植民地に於ける革命運動ことに共產黨の戰術に就いて」と題し、長廣舌を振つたが、そのうちで反帝國主義運動の必要に關し左の如く演述しました。

民族的危險の益々増大する今日全國民を帝國主義に對する決然たる且つ容赦なき闘争に總動員する以外、支那を救ふ手段はない。同時に反帝統一人民戰線以外帝國主義との神聖民族革命闘争のため全國を總動員する手段はないのである。中國共產黨は國民が黨の援助により速かに救國闘争のため眞に結合し得るやう反帝人民戰線を最も廣汎且つ強力に展開しなければならない。黨中央の意見によれば右戰術は支那の全國民、政黨、團體、軍隊、大衆團體、有力なる政治的社會的活動家をして支那ソヴェート政府と共同して統一民族防

衆人民政府を組織せしむるにある。

これを要するに新方針、新戦術は、(イ)コミンテルンの側に於ては第二インターとの間に反ファシズム戦線統一を行ふと同時に、(ロ)その支部たる各國共産黨の側に於ては、各その國情に應じその國の社會民主黨との間に戦線の統一をはかるべきのみならず職業組合、コーペラティブ、スポーツ團體、文化團體等、苟くも反ファシヨ鬭争上利害を同じうする改良主義諸團體との間に労働階級の戦線統一を行ふべく、反帝運動に關しても右と同様の團體、國民解放運動者、平和主義者、宗教的民主主義者等と人民統一戦線を張るべきであると規制し、(ハ)特に支那に於ては反帝運動に重きを置き、統一的國防政府の樹立と抗日聯合軍の組織を必要とすとなし、(ニ)しかして以上所謂戦線統一は單なる提携でなく、對團體の内部に浸潤し、その内部にあつて活動するものであるとし、浸潤主義を工作の基調とすべきことを強調してゐる等の諸點に於て、その特徴を見るに足るのであります。一見第二インターに叩頭したかのごとき觀を呈し、又本質に於て防禦的、消極的方針、戦術であることは争はれませんが浸潤主義的工作方法はむしろ甚だ實際的、效果的で成功の可能性が多く、頭から共産黨に引っぱりこむ戦術でないだけに、大衆誘引

の可能性が増大したともいへるのであります。

コミンテルン第七回大會の行はれてゐる最中に、中共は八月一日附を以て長文の抗日救國宣言を發しました。その最重要な一節は、左の通りであります。

各黨派が過去に於いて、又現在に於いて、政見・利害を同じくしないにせよ、各軍隊が過去及び現在に於いて、敵對行動を執つてゐるにせよ、均しくすべての人は、『兄弟鬩に聞けど、外、侮りを防ぐ。』といふ、眞の自覺が必要である。先づ一切の内戦を停止し、あらゆる國力(人力・物力・財力等)を集中して、抗日救國の神聖な事業のために闘はねばならぬ。國民黨軍は、即時ソヴェト區攻撃を中止し、對日戦を準備すべきだ。紅軍は國民黨軍との舊仇・宿怨にこだはらず、彼等と親密な提携の下に、協同救國を希望する。同胞、軍官、士兵、諸黨派、諸團體、國民黨及び藍衣社内の民族意識ある青年、被壓迫少数民族よ、起ち上つて日寇及び蔣賊の壓迫を破り、中國ソヴェト政府と東北の抗日政權を單一的・全國的國防政府に組織し、紅軍と東北人民革命軍及び各地抗日義勇軍を、單一的・全國的抗日義勇軍に組織しようではないか。黨及びソヴェト政府は、國防政府の發起人たることを希望し、直ちに各黨派・團體・地方軍政機關と國防政府共同樹立を討議しよう。國防政府は救亡團存の臨時指導機關、全國同胞の代表機關として、抗日救國の具體辦法を討論すべく、その重要責任は抗日救國に在り、その下に抗日聯合軍が組織されねばならぬ。統一ある國防政府指導下に、單一的抗日聯軍が先驅するならば、必ずや日本帝國主義に打ち勝つことが出来よう。

この宣言を契機として、抗日運動は俄然盛んとなり、各種抗日團體が雨後の筍のごとく産れ、

抗日宣傳雜誌の盛んな賣行きは、發禁又發禁を以てしても抑へることが出來ず、若干の學生は大デモを敢行して實踐に一步を踏み込む等、抗日戰線結成運動は、未曾有の昂揚を呈し、終に一九三六年六月までに、中共を最左翼に、中華民族革命同盟、十九路軍、廣西軍、二九軍、全國各界救國聯合會、全國學生團、著作人協會、文藝家協會、東北義勇軍等を含む廣汎な抗日人民戰線が成立しました。ことに注目し値ひするのは、この戰線が、地域的に滿洲國をも含んでゐることです。即ちその一部であるいはゆる東北義勇軍は、『抗日合同軍』の名の下に十萬の赤色バルチザン隊を擁してゐるのです。

コミンテルン及び中共が、かうした成績に雀躍し、一層大童になつて煽動に努めてゐることは、申すまでもありません。一例を挙げますと、例の『ソヴェート共和國』といふ名を、『人民共和國』と改稱し、革命的ブチ・ブル分子、インテリゲンツィアに選舉、被選舉權を與へ、抗日に参加する白軍士兵を優待し、黨の政綱に一部變更を加へ、富農の土地をも沒收しないこととし（即ち一切沒收しないこと）た等、かなり思ひ切つた宣言をしてゐることであります。その狂奔振りには、たゞ驚く外ありません。

一〇 結 び

以上述べたところに依つて、中國共產黨が、世界革命を目指すコミンテルンの支那支部としていかに支那赤化のために努力したかが了解されただらうと思ひます。最近はことに抗日運動に重きを置き、宣傳、民衆組織、抗日軍強化等に大童の奮闘をつゞけてゐることも、前述した通りであります。

かうした現前の情勢に處して、日本はどういふ態度を採るべきであらうか？ 又、採りつゝあるか？

それは極めて明白であります。東亞の安定勢力である日本は、東亞の赤化を目標とし、對日戰爭準備の一環を、第三國內に於いて形成しようとするコミンテルンの工作を默過することは出來ないのであります。約十回に亘つて、對日宣戰通電乃至抗日宣言を發表し、その政綱に於いて、『外資に依る銀行その他一切の企業の沒收』を採用してゐる中國共產黨（コミンテルン支那支部）の存在を許すことは出來ないのであります。

同様に、對日宣戰、對日經濟絶交、在支日本權益及び日本人財産の没收を宣言し、對日罷業（一九三六年十一月から十二月にかけての上海、青島）を煽動する抗日諸團體（それは取りも直さずコミンテール系、即ち邦人紡績罷業煽動は、その最近の著るしい例です。）を煽動する抗日諸團體（テルン、及び中共の表現團體であります。）の存在を許すわけには行かないのであります。

東亞の安定勢力である日本は、敍上の見地の外、支那の統一を希望する建前からして、コミンテルン系勢力の一端を、支那に對して要望せざるを得ないのであります。何となれば、コミンテルン系勢力の跳梁するところ、支那の統一は決して望まれないからであります。

もしそれ、コミンテルンが日本自體に働きかけて來た場合には、日本はあらゆる國力を以てこれを絶滅する覺悟を持つて居り、過去に於いて、コミンテルン影響下に、共產黨乃至類似團體の發生を見た際、その都度鐵の如き峻嚴な檢査を以て、これを撲滅して來てゐますが、この方針には未來永劫一點の變更もありません。といふのは、コミンテルンは、かつて存在したその日本支部に對して、わが日本臣民として筆にするだに恐懼にたへぬやうなことを指令した結社であるからであります。

獨逸との間に防共協定を締結し、支那に對しても、赤化共同防衛を提議したのは、敍上日本の

態度・決心から見て、極めて當然なことでありませぬ。

不幸にして、支那は日本の眞意を理解せず、防共協定は成立の運びに至りませんでした。二月十二日西安に起つた事態はどうでせう？ 抗日人民戦線に移行した張學良及びその麾下の舊東北軍は、國民政府軍事委員長蔣介石氏に對して、ソヴェート・ロシアとの提携、共產黨・軍の容納、對日即時宣戰を強要し、その聽かれざるに及んでは、一大クーデターを發動して、蔣氏を監禁するに至つたではありませんか？

この實物教訓を何と見る？ これでも防共の必要なしと言ひ張るのでせうか？ 支那が一大覺醒を遂げ、日本の提議した國際的大經綸である赤化共同防衛に合流すべき機會は、今日を措いてないのであります。支那當局の聰明、尙未だほろびずとすれば、恐らく選擇を誤まらなからうと、私は、善意を以てこれを信するものであります。

337
660

支那赤化の實勢力
中國共產黨の活躍
定價十錢(送料二錢)

昭和十一年十二月廿五日印刷
昭和十一年十二月三十日發行

不許複製轉載

著者 松本忠雄

發行人 伊藤稔

印刷所 安久社印刷所
東京市芝區田村町三十番地
東京市芝區新二ノ四十八

發行所 第百書房

營業所 東京市芝區田村町三十番地
振替東京九〇七七番
東京市芝區田村町五三番地

東京鐵道局
鐵道保養會

(鐵道各驛ホーム及
スタンド一手販賣)

鐵道弘濟會・鐵道授産會

富田報英堂

大取次

森田書房(全國一手扱)

東京堂(書店一手扱)

新正堂(京阪神一手扱)

川瀬書店(名古屋)

終